

年齢を感じさせない、エネルギーに満ちあふれた人だ。昨年、25年ぶりに米国から帰国。世界各地の人々の考え方や行動規範の違いを知り、課題を解決する行動力を身につけさせる子供向け教材を開発し、その普及のために東奔西走する。

教材は、国際理解を目的とした「地球市民村への10のステップ」。戦争や宗教などの史実に基づく20の体験プログラムを盛り込んだ世界地図を使い、「地球村



「地球市民村への10のステップ」の授業を行う渥美育子さん（左）＝東京・新宿（渥美さん提供）



あつみ・いくこ 昭和15年5月、名古屋市生まれ。67歳。青山学院大学大学院修了。同大助教授、ハーバード大客員研究員を経て、インターカルチュラル・ビジネスセンターを米国で設立。その後、子供向けグローバル教育のプログラムを開発。昨年6月、家族の転勤に伴い帰国。今年から「グローバルみらい塾」塾長。

NPOグローバルみらい塾塾長

渥美育子さん

の新しいルールを作ろう」「惨事と偉大な業績の分かれ道」「友情はどんなふうになり、消えるのだろうか」といったさまざまなテーマを子供たちに考えさせる。

きっかけは、2001年9月11日、米国を襲った中核同時テロ。ニューヨークからニュージャージー州の自宅に戻ったものの、テレ

ビニュースは、次の攻撃の可能性を繰り返し報じていた。役所からは、発電所が攻撃された場合の避難方法を具体的に指示された。

「その日は無我夢中。でも、その後にもっと怖くなりました。無差別テロに対する手段がない。次の攻

材育成のマネジメント会社を起業した。

マネジメント会社では、

35カ国の出身者の協力を得て、世界の人々はどのような行動様式を決定していくかを色分けして、分類する大人向けの「文化の世界地図」を開発。ダイバーシティ（多様性）マネジメントの先駆者として、米タイム誌など多くのメディアで紹介され、多国籍企業を中心に研修を行った。

異なる世界の文化、子供たちに

も、それぞれ異なっています。それを俯瞰できる地図があれば、世界中の社員のマネジメントに役立つのです。でも、戦争や暴力を否定し、世界を一つのグローバルな集団として考える力を身につけるには、大人になってからでは遅い。世界中の子供たちに、共通の教科書が必要だと思いました」

9・11の後、約2年かけて教材を英語、日本語で開発した。今年4月26日には、日本で初めての授業を開催。小中学生25人（うち3人は外国人）が参加した。ただ、日本の子供たちからの自発的な発言は少なく、プログラムや教え方の課題が浮かび上がった。

「個人の力は大きく、大勢が努力し力を合わせることで世界は変わることを知ってほしい。多くの日本の子供たちを引きつける教材にしていきたい」

文・写真 村島有紀